

17. I-131 MIBG による治療を行った Sipple Syndrome の1症例

古澤 光浩	下村 修	富口 静二
廣田 嘉久	高橋 瞳正	(熊本大・放)
山内 穂滋	曾根 泰子	岩岡 大輔
佐藤 卓男	(同・三内)	

褐色細胞腫と甲状腺髓様癌の合併したいわゆる Sipple Syndrome で、肺および肝に転移をきたした症例に対し、原発巣を摘出した後、転移巣に対し、I-131 MIBG 3.7 GBq による治療を行った。投与後のシンチグラフィでは肺および肝の転移巣に対し、I-131 MIBG の著明な集積を認めた。投与後、肺の転移巣についてはほとんど画像上、変化を認めなかったが、肝の転移巣は次第に内部の壊死性変化が著明となってきた。血中および尿中カテーテールアミンは治療直後は高値であったが、徐々に低下してきた。自覚症状も改善し、I-131 MIBG による治療が奏効したものと思われた。

18. 二次性副甲状腺機能亢進症における副甲状腺摘出後の骨シンチグラムについて

桂木 誠	盧 徳鉉	工藤 祥
岸川 高	(佐賀医大・放)	
佐藤 隆	古賀 伸彦	(古賀病院)

透析中に生じた高度の副甲状腺機能亢進症に対して行われた副甲状腺の摘出術後の骨シンチグラム所見（主に骨軟部組織集積比）について検討した。対象は男性2例、女性3例で摘出術後から最近の骨シンチグラフィまでの期間は4か月から40か月（平均19か月）である。術後副甲状腺ホルモンが明らかに低下した3例では、術後4から6か月後のシンチグラムで集積比の低下が認められ、骨代謝の改善が示唆されたが、ホルモンレベルの十分低下していない例では、骨シンチグラム上も明らかな変化を認めなかった。骨シンチグラフィは術後観察のひとつの目安になるとと考えられた。